

小やな慾

正白の自白

(二)

海岸の松林まつばやしの中の小やな貸別荘で、病後の保養をしておる豊村の妻君のところへ、野田屋の末娘すえむすめのたつ子は、屢々遊びに出掛けた。少くも日は一度は顔を見せに行くと、半月ばかり續いた。無邪気な聲こゑ高い話はなしや、無遠慮な笑聲わらひこゑが、彼女の行つておる時だけ、不意はいつもしこおるこの別荘から洩れて来た。

「でも、奥様は此方こゝに最初はじめていらした時に見ると、大変お丈夫な身みおなりのなりましたね。血色ちよくがよつぽとよくおなりましたし、おひま顔おもてのところところが随分ずいぶんお肥ふとりなつた。チや沖おきはいいませんか。」  
 たつ子は、相手がよつちゆる健康のことことを氣をしておることを察さしておたのび、  
 「いゝ、こんなお世辞せじを云つた。豊村とよむらさん、  
 はる水みづもお世辞せじと知りながら、聞きいてお

その場限りの